BOOK GUIDE
今月のブックガイド

産まないことは「逃げ」ですか？

吉田 潮著
ベストセラーズ
定価 1200 円＋税

「逃げ」という闘いかた、笑いかた

昨年、ブレイクしたドラマ「逃げ恥」(『逃げるは恥だが役に立つ』）ならぬ「産ま逃げ」ワードを流行らせたいとねらう著者の思惑はさておき、「夜の課外活動（不特定多数との浮気)」が夫にバレて「三行半をつきつけられた」という自らの離婚経験を描いたデビュー作『幸せな離婚』(生活文化出版、2006 年）から 11 年。この間、「震災婚」によって再婚し、不妊治療に臨み、そして 40 歳で「産まない」という選択に至ったという著者による「妊活」体験談である。「産む」ことをめぐるリアルな思い、そして「産む」ことに対する女性自身のとらわれから自由になろうというメッセージが綴られている。

子どもが欲しいと思った理由は、ただ一つ「彼を束縛したかったから」と彼女は言う。「やましいし、不埒な理由」かもしれないが、では純粋な理由とは何なのか。子どもという存在に自分の夢や期待を寄せ、子どもをもつことで自分の人生を変えようとする人は、いくらでもいる。あくまでも自分の欲求に忠実に、妊娠に向かって「頑張った」彼女の身に起きたのはストレスによる円形脱毛症と、彼に対する「射精ハラスメント（中出しの要求)」を原因とする離別。その後、「元鞘」に収まった二人は「39 歳なのでスピード＆効率優先主義」で不妊治療を開始する。体外受精による不妊治療にかかる時間や心身の負担、「卵の質を上げ」るための激痛マッサージ、重なる費用・・・そして、初めての妊娠と流産。

流産のあとに押し寄せてきた悲しみと寂しさについて、彼女は考える。それは「人様ができていることを自分はできない」という不全感と劣等感だった、と。妊娠は思い通りにならないという現実から、女友だちに「早いほうがいい」と煽ってしまう「不妊マウンティング」をしてしまったり、友人の妊娠を心から喜べなかったりした自分自身の「黒さ」も率直に打ち明ける。そして、「産む」ことへの「妬み」と「呪い」から抜け出すことを決意する。

著者が辿り着いた「子どもがいなくても自分が主語の人生をいかに楽しむか」という結論は、フェミニズムやウーマンリブによる「産む、産まないは女(わたし)が決める」にほかならない。産もうが産むまいが、人生の選択肢を自分で決め、自分の人生を楽しむこと。その自己決定は、現代でも難しいし、現代だからこそさらに難しいのかもしれない。子育てにかかる経済的負担や社会資源の乏しさから産むことへのハードルが高まる一方、生殖技術による妊娠の可能性は広がっている。

産んだ女と産んでいない女を「勝ち／負け」に分断する社会に対し、あえて「負け犬の遠吠えですが？」と笑ってみせた『負け犬』ブームが起きたのは 2003 年。「産んでいない女が何を言っても、どうせ聞いちゃいないんでしょ？」と社会の態度を皮肉る独身女性の“闘いかた”は、それまでの「女も勝てる」という“戦いかた”とは異なるものだった。そして今、産まないことや結婚しないことを「逃げだ」と迫る社会に対し、『逃げるのも役に立つ』と“笑う”生きかたが受け入れられつつあるのではないか。「そもそも妊娠や結婚だって、一つの『逃げ』の手段でしょ？」と。「逃げ」という生きかたを肯定する目新しさはあるものの、出産や結婚が社会によって意味づけられる現実は変わっていないとも言える。

本書は「妊活」のリアルのみならず、「更年期」目前のリアルも満載である。40 代になると「生理もなんだかグズグズし始め」、最近は「スタートがショボイ」など、著者と同世代の私としては“40 代なう”の情報にグッときた。産まないからだも、愛おしく思える。

（大阪大学大学院准教授　野坂祐子）